

締め切りがあるから 50年続いたのです



小竹 英夫先生

略歴

明治43 (1910) 年3月19日…………… 札幌生まれ
昭和 9 (1934) 年…………… 北大医学部卒 第一内科
昭和19 (1944) 年……………北大臨時医学専門部教授
昭和22 (1947) 年……………国立旭川病院長
昭和25 (1950) 年……………札幌市で開業
昭和48 (1973) 年……………閉院

昭和36 (1961) ~49 (1974) 年
北海道医師会常任理事
(42~43年度は調査弘報部長、44~48年
度は広報部長)
昭和37 (1962) 年
道医報『医事・文談』連載開始

著書

『医事・文談』『続医事・文談』
『札幌市の開業医師一号柏倉忠粛とその周辺』

編著

『関場理堂選集』『北海道医師会30年史 (1979)』
『北海道大百科事典』に北海道の医事と医人について21項目執筆



会長 長瀬 清



情報広報部長
藤原 秀俊

特別対談

小竹 英夫 先生・長瀬 清 会長

平成20年2月6日(札幌後楽園ホテル・小石川)

司会進行…藤原秀俊 常任理事

数えで来年100歳になるんです

藤原 本日は北海道医報の「医事・文談」が、5月号で連載1,000回を迎えることを記念して、著者である小竹英夫先生をお招きし、長瀬会長との対談を企画いたしました。よろしくお願いいたします。

小竹 今日はこのような会を開いていただきありがとうございます。

私は来年100歳になります。耳は遠いし、総入れ歯が合わずにグラグラしているから、お聞き苦しいかもしれません。

長瀬 お寒い中お越しいただいてありがとうございます。本来ならば先生のお宅に伺ってお話をお聞かせいただくところですが、先生はビールが大好きということでご足労いただきました。

小竹先生は私の父親（一昨年逝去）と同じ、明治43年のお生まれです。

道医報にも軟らかい読み物が欲しい

長瀬 まずは、北海道医報（以下、医報）に連載を開始した経緯からお伺いしたいのですが・・・

小竹 連載開始は、昭和37年の7月16日号（第64号）からです。

連載開始の経緯については、当時のことを少しお話ししなければなりません。

当時、日医の会長は武見太郎でした。ご存知のように武見会長は“喧嘩太郎”と言われるほどの荒くれ者。厚生省の役人に「バカヤロー」、中医協の支払側委員にも「何をぬかすか」などと言うわけです。

武見会長のリーダーシップが強いから日医としては統制がとれていましたが、北海道医師会の中には親日医だけど反武見という人が多くみられました。他の郡市医師会では、札幌は反武見、小樽、函館、

室蘭などが親武見でした。ですから北海道の中でもいろいろな意見があったんです。

今ではあたり前になっている再診料ですが、これは武見さんが考えたものです。「医者は初診だけでなく2回目でも3回目でも、所見を自分で考えるのだから診察料を取れるはずだ」と言い出したわけです。ところが当時は誰も再診料が取れるなんて考えたこともない。武見会長は頭が良く色んなことを考えるのですが、一方で「バカヤロー」「お前」とか言うものだからアンチ武見という方も随分いました。

長瀬 先生はアンチだったのですか。

小竹 私は札幌市医師会ですから大体はアンチ。そんなに暴言を吐かなくてもいいと思っていました。その一例が、吉田富三さんの件でしょうね。反武見だった東大名誉教授の吉田富三さん（ラットの腹水がん「吉田肉腫」を発見）が日医の会長選に立候補すると、武見が「何を言ってんだ不名誉教授。お前なんか医療のことが分かるものか。病理学では偉いかもしれないが、医療制度のことなら俺が一番だ」というわけです。支持者は武見の方が多く、終わってみれば武見会長の圧勝でした。

そうした影響は医報の誌面にも及び、ずいぶん固い内容ばかりが掲載されていました。それで少しは軟らかい、読みやすいものを載せようということで、最初に前川君（前川弘治常任理事）が「バラの手入れは難しい」というタイトルで書きました。前川君はバラ作りの名人でしたから。消毒薬を毎日かけないとすぐに虫がついてダメになるという内容だったと思います。

理事が交代で担当するため、「書け」と言われて次号は私が書きました。読みきりを2、3回書いて責任を逃れようと思ったんですが、書いてるうちに1回では書き切れないものが出てきて、もう少し書こうかなと思ったのが連載のきっかけですね。初めはごく短い文章でした。それが、開業医のルーツを調べて

書こうとか、結核の歴史だとかを書いたら、随分と長いものになった。私自身1,000回も続くななんて思いもしませんでした。

長瀬 小竹先生は絶対に締め切りに遅れない。昔、我々も分担執筆で書くことがありましたが、締め切り期日が来てもなかなか書けない。小竹先生も多分書いてないだろうと思って、「先生、書きましたか」と尋ねると、「君、それはあたり前だ。締め切りまでに書くのはあたり前だ」って怒られました（笑）。

小竹 だけどね、『医事・文談』がこれだけ続いたのは、やはり締め切りがあるから続いたんで



す。締め切りがあって明日だ明後日だって分かるから、じゃあそれまでにちゃんと書いて出さないと迷惑かけるなということだ。

長瀬 休載されたことはありますか？

小竹 休んだのはね、お袋の葬式のときに1回くらい休んだ。

僕も、目の手術、スキーで転倒して背骨の圧迫骨折で入院したこともあるけど、あまり大きな病気でなかったから連載が続いたんですよ。



道医報第64号。
小竹先生の連載がスタートした

50年間で10のペンネーム

長瀬 連載100回ごとにペンネームを変えられていますね。

小竹 一人で誌面を独占するのは申し訳ないと思ひまして。1,000回というと約50年近くですから。

100回ごとにペンネームを変えていますから、これまで通算10人が書いていることになります。

長瀬 独特なペンネームの由来について、お聞かせください。

小竹 最初は「半角（はんかく）齊（さい）老人（ろうじん）」。「はんかくさい」は北海道弁で、少しおかしな奴という意味がありますね。年齢もすでに50歳近くでしたから老人といってもいいだろうと。本名で原稿を書いて「小竹」と掲載されたら恥ずかしいから、少し頭がおかしな奴が書いてるというふうにしたくて…。

二番目は、いつまでも老人でいないように、少しは若さを保ちたいということで、「留（りゅう）春（しゅん）園（えん）主人（しゅじん）」。

三番目は当時住んでいたススキノにちなんで。ススキノはもともと花柳の巷です。当時は芸者、それから少し変わった女の人がたくさんいました。だから花柳の巷にいる暇人で「柳暗花明楼（りゅうあん

かめいろ）閑人（かんじん）」。

長瀬 お住まいはススキノのどの辺りだったのですか。

小竹 南六条西五丁目だからススキノの真ん中です。周囲の環境が悪くなり住みづらくなったので、今の平岸のマンションに移りました。

四番目の「対岳書屋（たいがくしょおく）散人（さんじん）」というのは、マンションの窓からきれいに見える恵庭岳に由来しています。いいところに引っ越したと思いましたね。恵庭岳がよく見えるんです。

五番目は「杏（きょう）雨生（うせい）」。「杏雨」というのは、武田製菓（武田科学振興財団）の管理する書庫「杏雨書屋」のことです。製菓・医学関係のものがたくさんある素晴らしい書庫だそうです。僕もそれにあやかり「杏雨」と付けました。

六番目は、夢みたいなことを書いている、と皆さんに思われているだろうから「夢想甚（むそうじん）解（かい）居士（こじ）」。夢のようなことを考えてそれを調べるのは「甚解（甚だしく解く）だ」ということで。

七番目の「磯貝（いそがい）鴻（こう）」というのは、今まで変なペンネームばかり付けましたから、少しはまともな名前をと思って…。何も根拠はありません。

八番目は説明が必要ですね。「小さい河と内の男也」で「しょうがないおとこなり」。しょうがない男だと漢字で書いたのが「小河内男也」。ただし読みは「おごうちだんや」です。

1回 (S37. 7. 16)～100回 (S41. 12. 16)	半角齊老人 (はんかくさいろうじん)
101回 (S42. 1. 1)～200回 (S46. 4. 16)	留春園主人 (りゅうしゅんえんしゅじん)
201回 (S46. 5. 1)～300回 (S50. 9. 1)	柳暗花明楼閑人 (りゅうあんかめいろかんじん)
301回 (S50. 9. 16)～400回 (S54. 8. 1)	対岳書屋散人 (たいがくしょおくさんじん)
401回 (S54. 8. 16)～500回 (S59. 1. 1)	杏雨生 (きょううせい)
501回 (S59. 1. 16)～600回 (S63. 5. 16)	夢想甚解居士 (むそうじんかいこじ)
601回 (S63. 6. 1)～700回 (H 4. 9. 16)	磯貝鴻 (いそがいこう)
701回 (H 4. 10. 1)～800回 (H 9. 2. 16)	小河内男也 (おごうちだんや、しょうがないおとこなり)
801回 (H 9. 3. 1)～900回 (H13. 7. 16)	大藪魯堂 (おおやぶろうどう)
901回 (H13. 8. 1)～	平岸三八 (ひらぎしさんばち)

ペンネームはひとりで誌面を壟断しているとの非難を免れるために、100回毎に変更。

九番目は「大藪魯堂（おおやぶろどう）」これは私が偉い医者でなくヤブ医者で、ヤブ医者のうちでも大ヤブだと、「魯堂」＝「バカヤロー」ですから、大ヤブのバカヤローという意味です。

十番目が現在の「平岸（ひらぎし）三八（さんぱち）」。今の住まいが平岸の三条八丁目なので「平岸三八」とつけました。

長瀬 いやいや凄いですね。ペンネームを考えるだけでも骨が折れますね。

小竹 やっぱり少しおかしいでしょ。自分でおかしいと思ってるんですから。

長瀬 ユーモアがあって素晴らしいです。

藤原 1,001回からの新しいペンネームは？

小竹 これから考えますよ。これから100回使うペンネームですからね(笑)。今度はいよいよ本名をいれようかな「小竹英夫」と。

長瀬 「小竹英夫大翁」というのはいかがですか？

小竹 1,001回目から「小竹英夫」かどうかは分かりませんよ。僕の名前を載せたら、みんな嫌がるでしょ(笑)。

蔵書は1万冊以上。 すべて売り払いました

小竹 現在、医報は月1回ですが、以前は月2回発行していました（創刊から2003年3月の1014号まで）。当時は「医事・文談」以外に「医師の教育」も書いていました。その「医師教育史」を書きあげるまで、大体10年間原稿を書きました。当初は1カ月に「医事・文談」2編、「医学教育」2編、計4編の原稿を書いていました。道医の原稿用紙で約50枚（242字詰）、毎月何か書かなければいけない。

頭の中にあることを書くのですから、いかにもやさしいように思われるかもしれませんが、書いたも

のはずっと残りますから正確な根拠のあるものを書かなければならない。そのためにはかなりの文献、資料にあたる必要があります。自分の商売（診療）以外で随分忙しい思いをしたこともありました。

皆さんだって同じですよ。たとえば学術論文だって、知らないことを書くわけではない。頭の中にあること、自分のしたことを書くわけですから。しかし正確に書くには、資料をしっかりと押さえなければ書けない。

幸い大体の資料は私の書庫にありました。書庫は3カ所あるのですが、非常に雑然としていて「あの本、どこかにあったな」「あのことはあの資料にあったはずだ」と、該当資料を探すのが一番大変です。だんだん資料が多くなるから、本棚に前後2列に重ねて収納すると、奥の方に何の本が入っているか分からなくなる…(笑)。

長瀬 蔵書は何冊くらいありますか。

小竹 1万冊以上はあったんじゃないですか。つい数年前に全部ひと思いに処分しました。私が死んだときに遺族が困るんじゃないかと思って。女房も子どもも私の本なんて全然関心ありません。孫の一人は医者になっていますが、その孫だって…。

長瀬 相当な金額になったんじゃないですか。

小竹 古本屋に売るときは、買い叩かれて安い値しかつきません。私も20～30万円位だろうと思っていましたが、100万円以上になりました。

長瀬 価値のある本が多かったのですよね。買い揃えるのにかかった金額はどれくらいでしょうか。

小竹 いくらになるか分かりません。新刊ばかりではありませんし、古い本や昔の資料など古本屋でなければ買えないものもありますから。学生のときから古本屋に足しげく通ったものですから、古本屋とは非常に仲良くなりました。だから蔵書を処分したのも知り合いの古本屋です。

今も本を読みます。私は囲碁・将棋・麻雀っていう室内遊戯はぜんぜんできない。本を読むくらいしかない。本屋にも行くし、新しい出版物もときどきは買ってきてそれを読んで。だけどだいぶ目が悪くなってきて、何だかスラスラとは読めないけれど、何もすることがないものですから、本は読みます。

今、東区にある「丸善」が、昔は北大前にあり、その後駅前の大同生命ビルの所へ移り、さらに三越横に移転したことを知っている人も今では少ないだろうね。



医師でなければ、 商社マンになっていたかもしれない

長瀬 医師になった動機をお聞かせください。

小竹 私は中学のときはあまり勉強しませんでした。親父が心配して家庭教師に医学部の学生を雇ってくれたんです。その家庭教師の話が大変面白くて、どんどん引き込まれました。

例えばドイツ語の名詞には「性」があって、しかも大文字で書き始めるんだとか、医学部では解剖もやるという話をするものですから、「医者も面白いもんだ、ひょっとしたら僕も医者になれるかな」と。それで少し勉強を始めました。

北大の医学部を受験したら、幸いにも知っている問題ばかり出たものですから、うまい具合に合格できた。もし家庭教師にいろいろ教わらなければ、医者にならなかったでしょうね。



小竹先生が出版された単行本「医事・文談」「北海道医学教育史攷」

今も医学部の競争率は相当高いのですが、私のおときも競争率が10倍以上でした。合格する自信はもちろんありませんでした。それで北大と同時に小樽の商科大学（当時は高等商業学校）も受験。運よく両方合格できました。どちらに入学するか迷いましたが、医者になった。もし小樽高商を選んでいたなら、銀行マンか商社マンとして一生を終えることになったのだと思います。

長瀬 出身中学はどちらですか。

小竹 札幌第一中学校。今でいう札幌南高。だけど僕は、昔の中学は今の高校とは別だと思ふ。制度がまったく違いますからね。昔の中学なんて女性の生徒は全くおられません。ところが今の高校は女性もいるでしょう。それから年数が違いますね。旧制中学は4年ないし5年です。だから同じ学校だというのはおかしい。僕は「南高の関係者ではない」って自信を持っていうんです。札幌第一中学の卒業生ですから。

長瀬 先生は「医学教育史」の中で、女子医専は札幌医大の前身ではないと書いてますね。あれも同じ理由ですね。

小竹 よく覚えていますね。女子医専は廃校になってますからね。その後に札幌医大という別の学校ができた。時間的に隔たりがあるんですよ。

昭和18年、太平洋戦争以降は『余生』です

小竹 アリューシャン列島のアッツ島、キスカ島は元々米国領ですが、北太平洋に弧状に連なる列島の中でも北部に位置するため、戦略上は何も戦争に関係のないところです。

日本も米国領だからという理由で、陸軍と海軍で2つの島を占領したわけですよ。誰もいない所に行って、ここは日本が占領したぞって。ところが米国も自分の領土に日本軍がいるのは目障りなんでしょう。わざわざ取り返さなくてもいいようなところを「名誉にかかわる」ということで日本軍を追い出すために、アッツ島に上陸してきたんです。昭和18年のことでした。

それを奪還するため、日本陸軍は旭川の第七師団に増員令を出しました。それに僕も召集され、第七師団の第一野戦病院の一員になりました。小樽から船足の遅い輸送船に乗って向かうのですが、辺りには敵の軍艦、飛行機がウヨウヨといる。沈没させられて海の藻屑になると思いましたね。その時ばかりは「一巻の終わり」と覚悟しました。

だから昭和18年以降は僕に言わせると余生になります。しかし余生になってから結構たちます。結婚もしたし…（笑）。

長瀬 小竹先生が北大医学部をご卒業されたのは昭和9年の9期でいらっしゃる。同級生にはどのような方がいらっしゃいますか。

小竹 僕の同期で北海道医師会に関係があるのは、前副会長の赤倉君のお父さんですね。彼も九死に一生を得てキスカから帰ってきました。あとは結核の笠井義男君。9期で生きてるのは僕だけです。あとはみんな死んでしまいました。

道医師会の役員時代。 速報を印刷し続けて 輪転機が壊れた

小竹 医師会の役員を10年以上やりましたが、一番の思い出はやはり昭和46年の保険医総辞退。この時も日医は武見会長でした。全国の医者に「社会保険だけ辞退届けを出せ」との指令。従わなかったのは山口県だけ、あとの都道府県は全て総辞退した。

社会保険の患者さんが来ませんから、公立病院もそうでしょうが、とりわけ開業医は大きな影響を受けました。何しろ収入が無くなりますから。だからいつまで保険医を辞退するのかが大きな関心事でした。

そうした状況が一カ月続き、ようやく武見会長が

妥結四原則

医療問題について政府、自由民主党及び日本医師、歯科医師の両会は左記のとおり合意に達したので速やかに之が実現を期する。

記

- 一、医療保険制度の抜本的改正
- 一、医学研究と教育の向上と国民福祉の結合
- 一、医師と患者の人間関係に基づく自由の確保
- 一、自由経済社会に於ける診療報酬制度の確立

尚、右に依り

- (イ) 8月1日に予定の保険医総辞退は行われぬ。
- (ロ) 厚生大臣の設置する懇談会に両医師会代表は参加する。

昭和36年7月31日

厚生大臣	灘尾弘吉
自由民主党政務調査会長	田中角榮
日本医師会長	武見太郎
日本歯科医師会長	河村 弘

合意12項目

佐藤総理大臣、齋藤厚生大臣、武見会長の間合意に達した事項

(昭和46年7月27日～28日)

1. 厚生省の医療行政に関する姿勢を正す。
2. 医療保険の抜本改正案を次期国会に提案。
3. 医療基本法の制定。
4. 診療報酬における物価・人件費へのスライドと手直しを同時に行う。
5. 国民の連帯意識の高揚。
6. 生存期間の一貫保障。
7. 労務管理と社会保険の分離。
8. 負担と給付の公平。
9. 低所得層の有病率は高所得の有病率に比べて6対1の比率であるということ考慮すること。
10. 医療従事者の質的向上をはかること。
11. 大学研究費の公費負担。
12. 保険請求事務の簡素化。

当時の齋藤昇厚生大臣と交渉して妥結。その状況を「テレビで全国に放送しろ」と指示した。そういう点では、武見会長は非常に考えが鋭いんでしょうね。ですが妥結の条件は、僕に言わせると何だか抽象的だった気がします。もっとしっかり交渉すればよかったんでしょうが…。今もそれが少し残っているんじゃないですかね。

長瀬 保険医総辞退という行為に意義があった。

小竹 そうです。総辞退するだけの理由がなければ、いくら武見会長が「お前たち、辞退届けを出すように」といっても出さないはずですからね。それだけの相当重大な理由があったはずですね。

当時、私は道医で財務部と広報部の部長を兼任していました。総辞退が長引くと医者は収入が減り、

生活に支障をきたします。そのため数力所の銀行に「開業医が融資を受けにきたらなるべく低利で貸してほしい」とそんな交渉をしたこともあります。

刻々と情勢が変わりますから、夜通し印刷したニュースを道医の会員すべてに直送しました。「こういう条件になった」とか「今こういう交渉を政府としている」とか、刻々とニュースにした。毎日毎日、何千枚も印刷するものですから、道医の手回しの輪転機が壊れてしまった。

北海道医師会史(1979年)の編集長も私が務めました。あとがきにも書きましたが、見返しに山崎会長の心電図をあしらったんですよ。

藤原 医師会の役員になられて、いかがでしたか？

小竹 開業医というのは

自分の家にいないと

仕事になりません。一

にも在宅、二にも在宅。

家にいることが商売。

いろいろな人に出会え

たというのが医師会の

役員になって一番良

かったことです。医師

会に出て10年以上、い

ろいろな人と付き合い

た。代々医師会の理事

になるのは相当な人達

ですからね。その前に

僕は札幌市医師会の理

事を10年ばかりやっ

て、一番最後は札幌と

道医の理事を1年か2年同時に務めて、それから北海

道医師会の理事を10年ばかり。

別に僕に役員になる才能があったわけではないの

ですが、なんとなしに理事に選ばれた。ですから

医師会とは20年くらいお付き合いをしました。

長瀬 やっぱり続けてやらないとだめなんだね

(笑)。

藤原 そう。20年以上は(笑)。



北海道医師会史
(1979)

健康法は鉄アレイ体操と、歩いて7階を上がり降り

藤原 スリーピースのスーツ姿がお似合いですね。健康の秘訣は何ですか？

小竹 私は別に薬を飲んでいるわけでもないし、毎朝起きたら鉄アレイを持って我流の体操をしています。夏は家の周りを1時間位歩く。冬は寒いし、滑るから、マンションの階段を上がったり降りたりしています。7階に住んでいるので、7階から1階まで降りて、また上がる。

それからスキーもやってます。歩くスキー。旭川のバーサー大会は25回続けて出て、表彰されました。

靴下もちゃんと片足で立って履けますよ。要するに寿命というのはそれぞれにみんな違う。健康法でどうにかなるようなものではないと思うのですが…。

心掛けていることといえば、僕にできることは「嫌なことはしない」ということですね。

長瀬 それは若いときからですか？

小竹 若いときから、嫌なことはしない、それから人に教わることがあまり好きでない、だから将棋も囲碁もしない。だから学校も嫌いなんです。先生が教えるんだから。

長瀬 でも先生、教授をされてましたよね。

小竹 教えるのは良いんだよ。教わるのではないから（笑）。

教授になる前に医専の講師というのを2年ぐらいやりましたよ。教授がね「お前、医専の先生やれや」という。僕は医専の先生になる前に、軍隊に行っていたんですからね。中国に4年も行って戦争の稽古してたんだから、その間何も勉強していないから医専の先生はとても勤まらなと申し上げると、「いや、お前だってできるよ。何とか教えるくらいのことができるだろ」。そのときには第一内科の教室に僕より上の教室員がいなかった。先輩は軍隊に行ったり就職して地方に行ったりして、僕が第一内科の一番古参ということで「じゃあまあ仕方ない」と医専の先生になった。講義をしようと思っても簡単ではない。病気の概観の講義は原因・結果、あるいは病理解剖・治療・経過、いろんなことを系統立てて教えなきゃいけない。そんなことノートなしに講義できるわけがない。ノートを作るのが大変でした。

七十年共に暮らす妻が 毎日三度の食事を作ってくれる。 僕にはできないことだな

長瀬 先生が書かれた文章を、奥様はお読みにになりますか？

小竹 女房？ 女房はそんなの関係ないもの。

長瀬 （笑）。関係なくてもやっぱり読んでいるん



じゃないんですか。

小竹 女房も少しくらい僕の書くものを批評してくれればいいんだけど、ぜんぜん。一字も読みません。難しいんでしょう。普段の生活と関係ないことが書いてあるから、それを読もうとは思わないでしょうね。

今、女房のことが出たから話しますけど、女性というのは毎日毎日、三度三度お料理を作って「どうぞ召し上がれ」というのは、あれは男性にはとってもできないことだね。結婚70年くらいになるけど、その間、女房は毎日毎日料理を作って、僕はそれを黙々と食べるだけ。たまにうまい料理が出れば「これはうまいな」なんていいですけど。女房だって何十年と料理を作って暮らしてるのに、まったく張り合いがない男だと思ってるんじゃないかな。

藤原 先生、ビールがお好きなんですね。

小竹 札幌ビール会にも何十年か所属していました。月に一回例会があります。札幌ビール会はビール会社が経営していて、安い会費でいくらでも飲み放題。

藤原 晩酌はなさるのですか？

小竹 今も毎晩飲んでます。350mlの缶ビールを1本。それで足りなければ日本酒を杯で何杯か飲みます。

藤原 銘柄のお好みは？

小竹 サッポロビール。そりゃ札幌にいたらサッポロビールだよ（笑）。

現代日本語の文体を確立した、 正岡子規が一番偉いと思う

長瀬 正岡子規についての執筆が続いていますね。

小竹 子規は数え年の36歳で亡くなった。しかも晩年は結核で寝たきりなんです。

それでも子規は、まず和歌、俳句と短歌の革新をして、その次は文章の革新をした。現代の日本の文学・文芸というのは、俳句も短歌も盛んだし、いろいろな小説をはじめ、文章がありますけど、そのもとは子規から始まる。

もちろん日本語はずっと昔から、書くことも喋ることも言葉としてあったのですが、現在のようになったのは子規の力。だから僕は子規が一番偉いと思っている。

子規のことが大体書き終わりましたから、今度は子規と仲のよかった人たちのことを列伝として書こうと思う。子規は病気で寝ていて「痛い、痛い」と泣きながら暮らしていたのですが、偉い人といろいろ付き合いがある。そういうところも、僕は非常に偉いと思う。

子規の全集は別巻も入れて22～23はありますが、それは36歳で亡くなる晩年の5年間位寝ながら書いたものですから。本当に偉いものだと思います。

長瀬 先生はワープロをされるんですか。

小竹 私はね携帯電話を持たない、ワープロもパソコンもできない。だから全部手で書くんです。だからね『医事・文談』のほかに、医学教育史、これも全部一字一字手書きで書きました。今までの50年の間にペンだこはできていないが、右手の中指が痛いんです。一字一字書くからね。

長瀬 原稿をお書きになるときは下書きをされているのですか。書き直すことはありますか。

小竹 ワープロなら書き直しは簡単ですが、手書きの場合は書き直すのが大変。だから初めからなるべく間違わないように書いていきます。

長瀬 50ページ位の学位论文を書いたとき、教授にちょっと直されたら全部書き直し。何回書いたか分からない。

小竹 携帯がなかったり、ワープロができなかったら現代人じゃない。中学生だって携帯持ってますものね(笑)。

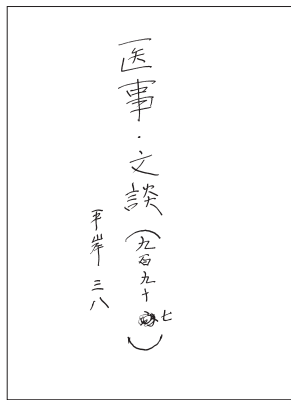
道医報の表紙が綺麗だ。医師会への提言は「？」

藤原 最近の医報をご覧になられて感想はありますか。

小竹 版形が大きくなったね。表紙は非常にきれいだ。

1月号の本間莞彩さん、2月号の菊川多賀さん。本間莞彩さんは札幌の出身ですよ、ススキノの私の家のすぐ近くにおられて、日曜日に近所の子どもを集めて絵の教室を開いていた。僕の子ども2人も本間莞彩さんのところに絵を習いに行ってた。

長瀬 道医報は全国的にも評判いいんです。



小竹先生直筆の「医事・文談」原稿



道医報平成20年1月号と2月号

小竹 昔も評判良かったよ(笑)。

藤原 医師会に注文はありませんか。

小竹 ありません(笑)。医者辞めてからね30年もたつんですから、今のことはまったく分かりませんよ。

家を出る前に朝日新聞の夕刊を見たら、ES細胞で血球がどんどん作れるという記事が出てました。万能細胞でどんどん血球ができる、輸血なんか非常に簡単にできるようになるという。これから医学というのはどうなるのですかね。しまいにはかえっておかしくなるんじゃないだろうか。

藤原 若い医者に希望することはありますか。

小竹 そういう偉いことはいえない。今のことが分からないから、これから先のことがどうなるかなんて分かりません。現在のことがあってはじめて将来のことが分かる。僕の頭の中に入っているのは昔のことばかりだもの。だからさっきからそれを吐き出してるだけ。

長瀬 いえ。生き字引きです。記憶力がいいから全部覚えてるんですね。

小竹 僕はね記憶力は悪いし、このごろはますますだめなんです。何か思い出そうと思っても、固有名詞とか数字とかすぐ頭に出てこないから、言葉になって出てこない。

藤原 いやあ、これだけ出てきたら十分…(笑)。



小竹 あなた方僕のこと感心するけどね、記憶力がこの頃はだめになっている。

僕の話聞いて面白い？

長瀬 たいへん面白いです。

小竹 何を言ってるの、だめだよ（笑）。

長瀬 皆が知らなかったことを…。

小竹 あなた方が知らないことをしゃべった。それはね、ただ昔のことを思い出してしゃべってるだけの話でね。

私は、地方紙と中央紙を2紙とって毎朝見ていますが、細かいことはぜんぜん分かりません。ことに横文字を仮名にしたものとかはまったく。新聞の題目を見てるだけだから2紙見るのに1時間もかからないんですよ。

長瀬 でも先生、万能細胞に関心がおありになる。

藤原 医者の血がたぎっていらっしゃる。ところ

で、小竹先生は道楽はおありになりますか？

小竹 そうだなー、美人を見ることかな。

一同（笑）。

小竹 今、札幌で美人を見ようと思ったらね、まずデパート。それから大きな本屋。大体「あ、これは」っていうのが一人か二人は…。

一同（笑）。

小竹 一人それを見つけたら、ときどき見に行く。だけど手は出さない。

一同（笑）。

長瀬 大爆笑というところで、本日はお開きにいたしましょう。

小竹先生長時間ご苦勞様でした。先生の益々のご長寿をお祈りして、また、さらなる『医事・文談』連載の継続をお願い申し上げます。ありがとうございました。



左より 長瀬 清会長、小竹英夫先生、藤原秀俊常任理事

対談を終えて

会長 長瀬 清

常任理事 藤原 秀俊

私事ですが、北大の同窓会新聞の編集をしていた当時、細菌学の山田教授（小竹先生の同期で、後に旭川医大学長）にインタビューして、今でもその時の録音テープを持っていることをお話しすると、小竹先生は大変懐かしがられて、「山田は中学を出てない。あれは非常な秀才で頭がいい。鉄道教習所に入所したところ『君は一生鉄道員で終わるような人間じゃない』といわれて、それから中学検定試験を通過して、北大で教授になった」とお話しくださった。

北海道医師会会員の最高齢者は102歳の方が一人おられますが、その次が御年98歳の小竹先生です。その記憶力の素晴らしさに改めて感服いたしました。

「座右の銘などという偉そうなものは、持ち合わせていない」と笑顔でおっしゃる。

2時間の対談を短く感じたのは、知識と記憶力だけではなく、座談の名手たる小竹先生のユーモア精神でした。

道医初代会長の関場先生以降のすべての会長と面識があると伺い、伝説を目撃する思いでした。対談を終えて、帰路につかれる小竹先生と長瀬会長をお見送りしましたが、雪道を杖もつかずにスタスタ歩かれる速度は長瀬会長と変わらない。医師として、また道医広報部長の大先輩として頼もしい限りです。現在の道医報をお褒めいただき、ありがとうございました。